岩手県高齢者社会貢献活動サポートセンター

かだる

ka da ru

シニアの社会参加情報誌

2014
3月
春号

※「かだる」という言葉は、岩手県の方言で「参加する」、「集う」、「加わる」などを意味します。

輝くシニア　心温まる方言で昔語り　子どもから高齢者、観光客へ

雫石・語りっこの会（雫石町）

囲炉裏を囲んで、昔から語り継がれる民話を孫たちに語る――。

現代では珍しくなった風景を、今の時代に復活し継承させようとする活動が雫石町で広がりつつあります。

雫石・語りっこの会（西山甲士良（こうじろう）会長、会員15名）は、平成24年6月結成。結成以前から雫石町コテージむらで開催されていた「昔話を聞く会」の語り部が中心となって活動しています。活動の本拠地は、曲り屋の中に囲炉裏が残る、町の歴史民俗資料館を使用。主に町内の小学校や保育所、高齢者施設などに出向いて公演を行います。

「私たちの語りは雫石弁にこだわっている」と西山会長は話します。「それでも、現代の子どもたちは、方言がわからないはずなのに、表情はだんだんと生き生きしてきて、よく伝わっているのがわかる。これは昔話が本質的に持っている力なんだと思う」と昔語りに大きな力を感じています。また、高齢者施設では、「高齢者は昔を懐かしんで子どもの頃を思い出し、目を輝かせて聞いてくれる。会員も高齢者なので、その時間は、ラジオも無かった時代まで共にタイムスリップできる」と幅広く親しまれていることが伺えます。

雫石・語りっこの会の皆さん

演目は、雫石町に伝わる民話や伝説を採話したもの。ストーリーは変えていませんが、地域によって方言が異なる場合は、語り部の持ち味、個性を優先し、語り部が話しやすい言葉で語っています。

雫石町コテージむらで毎年行われる「昔話を聞く会」

今年の冬からは、町内のホテルから依頼を受け、雫石町に訪れたスキー客や観光客向けにも昔語りを行っています。「観光客には、雫石の景観や食べ物だけでなく、都会の人が日常では味わえない文化にも触れてもらいたい」と観光資源としての役割も果たしています。

西山会長は「今後はさらに活動の範囲を広げたい。昔から伝わる物語だけでなく、例えば地元の災害など、教訓を語り継ぐのも大事だと考えている」と抱負を述べました。

語り部派遣など同会への問合せは、事務局・南畑地域協議会019-695-2306まで。

いきいきシニアライフセミナー　八木澤商店　河野会長が講演

平成 26 年 2 月 12 日、アイーナでセミナーを開催しました（共催：岩手県男女共同参画センター）。講師は陸前高田市の㈱八木澤商店代表取締役会長の河野和義さん。「ふるさとは負けない！」と題して講演しました。河野さんは、震災前後の状況を映像を交えて説明し、営業再開から現在に至るまでの出来事や会社の取組を紹介しました。

同会社は、味噌・醤油醸造業として江戸時代から創業 200 年以上の歴史をもつ老舗で、全国の品評会では最高賞受賞の実績を持っています。しかし、東日本大震災の津波で、店舗から工場、蔵、貯蔵していた原料などすべてを失い、「一時は廃業も覚悟した」と当時の心境を明かしました。しかし、社員を大切にすることを社是のようにしてきたことから「とにかく粘るだけ粘ろう」と社員全員の雇用確保をして会社の存続を決断。その後、津波で流されたはずの会社オリジナルのもろみが、震災以前に県水産技術センターへ研究用として提供されていたことで、そのもろみをもとに、営業再開に結び付けることができました。「震災ですべてを失ったが、ここまでの道のりは人とのつながりが起こした奇跡。これはお金に換えられない。人とのつながりが復興を導いた」と強調しました。

震災から現在までの道のりを熱く語る河野和義さん

講演のしめくくりでは、「自分はまだ 70 歳と思っている。もう 70 歳なのかまだ 70 歳なのか捉え方次第だ。シニアの皆さんは、まだまだやることがある。いい仲間といい一歩を踏み出してほしい」と参加者に向けてエールを送りました。

参加者からは「支えてもらうではなく、自分たちも社会を支えるという考えはとてもいい視点だ」「人とのつながりという言葉をもらって帰ります」などの声がありました。

シニアの生きがいづくり講演会　堀池喜一郎さんが講演

平成26年2月20日、同21日、一関市の一関公民館、大船渡市のリアスホールで講演会を開催しました（共催：一関市シニア活動プラザ、ＮＰＯ法人夢ネット大船渡）。講師は、東京都三鷹市のＮＰＯ法人シニアSOHO 普及サロン・三鷹前代表理事の堀池喜一郎さんで、「好齢者は地域で『志事』～事例にみる、うまくやる秘訣～」と題して講演。一関会場は約 50 名、大船渡会場は約 40 名が参加しました。同法人は、シニアがシニア自身をサポートするコミュニティビジネス（注）の先駆的事例として全国に知られ、経済産業大臣賞を受賞しており、堀池さんは、自らの経験や事例を交えながらシニアの社会貢献活動へのアドバイスをしました。

シニアの社会貢献活動について事例を交えて話す堀池さん

堀池さんは、「全国で約 1,500 万人いる 75 歳以上の高齢者の 3 割は認知症になると言われているが、東京大学と東京都が行った調査によると、適度な運動を行い、食生活に注意し、他人とのコミュニケーションを図っている人の発症予防効果は 5 倍である」と紹介。「現役時代、会社人間として生きてきた人は " ただのオジサン " から " ただならぬオジサン " に変身できるよう、住み慣れた地域で役立つように活動してほしい」と続けました。さらに、自身の法人運営の経験から「無償のボランティア活動よりも少額でもいいので、稼いだ方がいい。有償ゆえに責任感が芽生え、生きがいに留まらずやりがいとなる」と結びました。

（注）地域の課題を地域住民が主体となってビジネス手法を用いて解決する取組

地域の話題

県内各地で活動している団体を紹介します。

3B 体操の集い（陸前高田市）　「３Ｂ体操で心身の健康を図る」

3B 体操の集い（菅野咲子リーダー、会員 20 人）は、高齢者の運動不足解消を目的に 3B 体操（ボール、ベル、ベルターという手具を使い、音楽に合わせて身体を動かす健康体操）を取り入れて活動しています。同会は、平成 17 年、市が主催した健康講座の受講生有志によって誕生。当初は、市内のコミュニティセンターを拠点に活動していましたが、東日本震災によって多くの会員が被災し、各仮設住宅に散らばったことで、一時解散を余儀なくされました。しかし、県内外のボランティア等の協力もあり、平成 23 年 8 月から活動を再開。現在は仮設住宅に住む高齢者を対象に活動を継続しています。

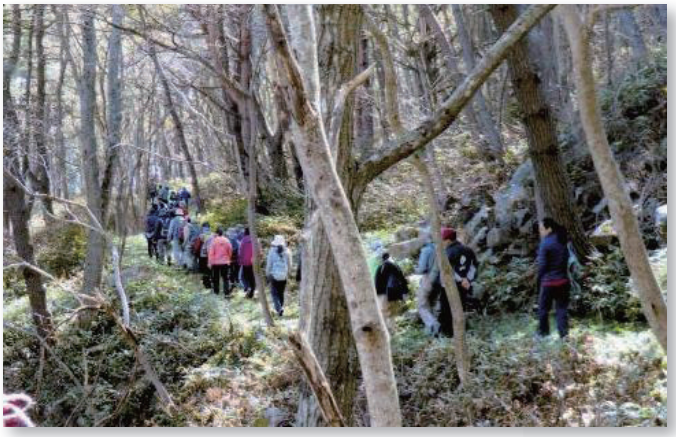
事務局の菊池文子さんは「震災により心身ともにダメージを受けたが、3B 体操を通じ、参加者同士の安否確認や情報交換もできて、参加者のよりどころとなっているので、今後も継続したい」と話しています。

3B 体操の集いの会員の皆さん

（この事業の一部に、いきいき岩手支援財団の「ご近所支え合い活動助成金」が活用されています。）

横沼らく・楽クラブ（久慈市）　「気楽に楽しくをモットーに世代間交流」

横沼らく・楽クラブ（林崎立身会長、会員 38 名）は、少子高齢化が進む中でも地域の活性化を図ることを目的に、久慈市侍浜町の高齢者が中心となって、平成 20 年に結成しました。グラウンドゴルフやロングトレイルツアーなどのスポーツ交流、環境美化活動、世代間交流を目的に畑づくり、収穫祭などを行っています。また、地域内では他にも 2 つの団体を立ち上げ、相互に連携し合うことで活動の広がりを持たせて地域の活性化に繋げています。このような活動実績から、平成 24 年には「元気なコミュニティ特選団体」として県知事から認定を受けました。



地域内の遊歩道を利用したロングトレイルツアーの様子

事務局の大向さんは「高齢者の参加が増加したことが嬉しい。地域の人と会う機会が増えたことや仕事の張り合いにもなっているようだ。今後も、気軽に参加できることをモットーとして続けていきたい」と抱負を述べました。

（この事業の一部に、いきいき岩手支援財団の「ご近所支え合い活動助成金」が活用されています。）

お元気シニアボイス　「山羊飼育奮闘記」　久慈市　木藤古 徳一郎さん（84 歳）

私が主宰する「バッタリー村」の中に体験牧場がある。かつては牛、馬、山羊、緬洋を飼っていたが、現在は山羊牧場に変身。牝 4 頭、牡 1 頭の計 5 頭を飼っている。牧場の目的は、高齢者の生きがいづくり、耕作放棄地の利活用、子どもや学生の情操教育などである。昨年は、沿岸被災地を訪問して移動体験牧場を行い、山羊とふれあう場を設けたところ大変好評だった。

動物の飼育は大変であるが、生きがいを感じることの方が大きい。過日、三つ子の赤ちゃんの誕生で、今までの苦労が一瞬に吹っ飛び感銘を覚えた。今のところ、寒さに負けず元気よく育っている。名前は、研修で訪れる中学生達に命名をお願いするつもりだ。今年は三つ子を加えて親子共々、より多くの被災地に訪問したい。

また、山羊牧場の管理の傍ら、コマづくりなど昔の遊びにも挑戦している。「夢コマ」と名づけ地元の小学校の卒業生全員にプレゼントしたいと思っている。

宮澤賢治「下の畑」保存会（花巻市）

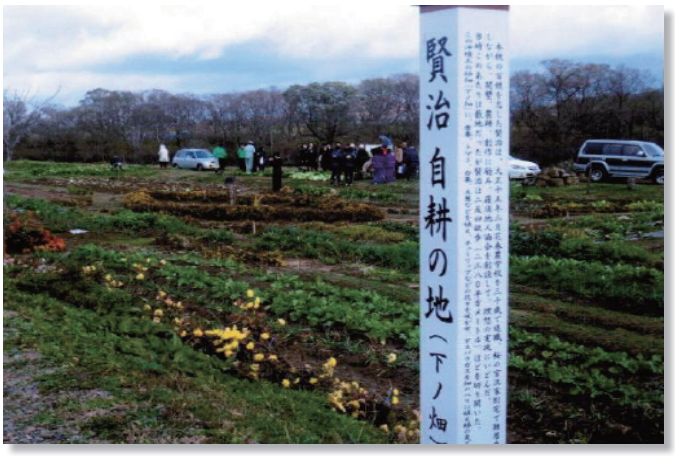
宮澤賢治「下の畑」保存会（菅野将勝会長、会員６名）は、平成 20 年４月、地元の 60 代から 80 代の高齢者が中心となって発足。「宮澤賢治を愛しわかり、その自耕の地『下の畑』をいつまでも大切に保存していくこと」を目的に活動しています。

「下の畑」とは、賢治が大正 15 年に花巻農学校の教師を退職した後、羅須地人協会を設立し、自耕自炊の生活を始め、一人で耕作した 20 アールほどの土地のことをいいます。同会では、この「下の畑」の中心部に、賢治が構想・設計した「涙ぐむ目」の花壇づくりとそれを取り囲む畑の野菜づくりを行っています。この花壇は、盛岡少年院にある同様の花壇を参考にして、その 10 分の１サイズで作製。昨年からは、ブロックで枠取りして整備を進めています。

これら一連の活動は、地域住民と共同で行うことで相互の交流を深めることにも繋がっています。例えば花壇づくりで春の花苗の植栽を行う際には、地元の老人クラブや小学校（南城小学校）に働きかけて共同で作業を行います。野菜づくりでは、会員が区分けされた畑に種を蒔き、手入れを行いますが、秋の収穫時には、地元の老人クラブの会員や南城小学校の生徒とともに共同で収穫作業を行います。

昨年９月には、賢治の詩に登場する白菜の品種のルーツが、宮城県塩釜市にあるという縁から、同市の小学校との交流が生まれました。同市から送られた苗を南城小学校の生徒が「下の畑」に植え、11 月には白菜を収穫。その白菜の一部を、会員が県内や宮城県の被災地の仮設住宅に届けました。

地元の小学校の生徒とともに収穫した、賢治の詩に登場する白菜



宮澤賢治 自耕の地「下の畑」

また、「下の畑」は羅須地人協会の建物跡や「雨ニモマケズ」の詩碑にも近く、賢治ゆかりの観光コースとして県内外の観光客やマスコミが訪れるため、会員が説明を求められる機会が多くなっています。そのため同会では、観光ガイドとしての役割も果たそうと、地域住民にも参加を呼びかけて、市内の賢治研究家を講師に「宮澤賢治に親しむ会」を開催するなど、改めて賢治について学習する場を設けています。

同会は、菅野会長が、長年放置されていた竹藪の荒れ地を刈払いして整地したことから活動が始まりましたが、現在、「下の畑」は、賢治ゆかりの貴重な財産となり、季節に合わせた花々や作物などで人々を楽しませています。また、地元の小学生の手により「下の畑」という題名で脚本が作られ、学園発表会の劇として発表されるなど、地域と一体となった取組として定着しつつあります。

菅野会長は「会の活動はまだ十分といえないが、今後も『涙ぐむ目』の花壇整備を進めて、県内や県外から訪れる多くの人たちが憩い、賢治に親しむ場所としたい」と話しています。

企画・発行 / 岩手県高齢者社会貢献活動サポートセンター　　平成 26 年３月 10 日発行
〒 020-0045 岩手県盛岡市盛岡駅西通 1-7-1 アイーナ６階　tel 019-606-1774　fax 019-606-1765
E-mail　koreisha-hfk@aiina.jp　　URL　http://www.aiina.jp/advancedage/index.html

岩手県高齢者社会貢献活動サポートセンターは、特定非営利活動法人いわての保健福祉支援研究会が岩手県から受託して運営しています。
〒 020-0021 岩手県盛岡市中央通 3-7-30　tel 019-604-8862　URL　http://www.hfk.or.jp/